

中澤政樹君を偲んで

金子芳樹

2004年10月20日、思いもかけない知らせだった。中澤政樹君(享年43歳)のあまりに早すぎる逝去の報。その日、心不全で倒れる直前まで、まったく普通の生活をしていたという。まさに急逝である。

比較社会学を教える九州産業大学国際文化学部助教授、というより、私にとって、そしておそらく彼を知る多くのJAMS会員にとってもそうであろうが、マレーシアのカンポンをソソコとサロン姿で闊歩し、愛車を駆ってマレーシア各地を走り回り、マラヤ大学(UM)やマレーシア国民大学(UKM)のキャンパスで口ひげをなでながら時を忘れて議論する、そんな姿がわれわれの中の彼であった。

中澤君は、筑波大学および同大学院で文化人類学を学び、その後マレーシアに赴いてUKMの大学院に籍を置き、現地調査を重ねながら研究を深めていった。彼は、急進派イスラーム集団が1984年に起こしたムマリ事件に強い関心を抱き、マレーシアの急進的イスラーム主義・運動の研究に傾倒していった。そして、調査地も同事件のあったケダ州ムマリ村にほど近い場所に定めた。1990年代初めに帰国して職を得た後もこのテーマを追い続け、最近、「マレーシアにおける狂信的イスラーム運動」(『九州産業大学国際文化学部紀要』第25号、2003年8月)を発表したばかりだった。

近年、イスラーム急進主義に世界的な注目が集まり、東南アジアの急進派、過激派についても、さらなる研究や専門家による情報提供が強く求められるようになった。彼の出番が回ってきたのである。そして、彼自身の研究も熟成期を経て、いよいよその成果を世に問う時期にさしかかっていた。まさにそんな時、彼はわれわれの前から永久に姿を消してしまったのである。

中澤君とは、1987年の夏から約3年間、マレーシアで留学生活をともに過ごした。当時、マレーシア研究を志す若手研究者がUMを中心に数多く留学しており、われわれもその輪の中にいた。そのうち毎週集まって勉強会を開くようになり、そこは互いの研究成果や体験を披露し、議論し合う道場となった。ジャンルを問わず、また滞在の長短を問わず、多いときには10人近くのメンバーが集ることもあった。だれもが血気盛んで、マレーシアのことを何でもいいから吸収したいと思っていた時期である。そのときのメンバーのほとんどが、後にJAMSの創設会員となり、中澤君もその一人として加わった。

この勉強会は、時として泊まりがけの視察旅行に出かけることもあったが、とりわけ中澤君が企画した視察の印象は強い。どんな人脈をたどったのか、彼のコネで、後に当局によって非合法化されるイスラーム急進組織ダフル・アルカムの村を訪れたことがある。世俗から隔絶されたコミュ

ーンでの彼らの独特の生活は、原理主義のあり方を考える上で多くの示唆を与えてくれた。また、やはり彼の案内でポンドック(イスラーム寄宿舎学校)を訪問したこともあった。一種別世界に紛れ込んだようなあのときの感覚は今もって鮮明である。15年前にすでにこれらの要素に注目していた中澤君の洞察力、そしてあっさりとそれらを調査フィールドに組み込んでしまう行動力に、いま改めて敬服の念をおぼえる。

決して、要領よく論文を連発する書き手でも、流れるような弁舌で聴衆を魅了する話し手でもなかった。しかし、根本までさかのぼって疑問を解き明かそうとする態度を貫き、常に確実な論証を追い求める研究者だった。研究面では安易な妥協やなし崩し的な転換を許さない頑なさがあったが、他方、日常においては周りの人間のことを親

身になって考える世話好きで心優しい男だった。マレーシアのイスラームに関する私の疑問に夜を徹して答えてくれたり、論文のドラフトを読んでその修正に何日も付き合ってくれたことを思い出す。

マレーシア研究の道をこれからもずっと一緒に歩いていけると思っていたのに、もはやそれは果たせなくなった。しかし、彼が残した研究成果を咀嚼し、彼が示した学問への姿勢を引き継ぎ、そして彼が提起したマレーシア研究の課題に必死で答えようとするのが、彼と彼の研究を生かし続けることになるように思われる。

マレーシアのどこかで、口ひげの下の白い歯を見せながら、にこやかに笑う彼に会えそうな気がしてならない。心よりご冥福をお祈り申し上げます。Salam Takziah.